

集団種目の観点に立脚したコーチ学の経緯と展望

松田 保¹⁾

The Circumstance and Perspective of Sports Coaching Study from the view of Team Sports

Tamotsu MATSUDA

Abstract

Coaching is science, philosophy and art.

German coach, Dettmar Cramer, so called a father of coaching soccer study, was a first man that taught the coaching study to players and coaches in Japan based on his work of theorization and systematization of coaching skill. After earning official coaching license level C in December, 2005 at Biwako Seikei Sports College, forty six young coaches were born to be men to create sports culture which should make Japanese soccer competitive internationally. They received a passport for practical coaching, and learned the way to take on a spirit of Cramer's coaching on them.

In this study, a history of the coaching study was stated from the view of four suggestions by Cramer, which suggestions were establishment of top league, coach development, building up the strength of a national team and obtaining grass pitch, and was stated from the view of concept that coaches need to attend the accreditation program for official coaching license level S. This concept includes open mind, global standard, and paradigm shift of changing tacit knowledge to formal knowledge.

A prospect on coaching trend and championship sports culture were discussed from the view of the philosophical point of view of the coaching study such as the way of life and thinking, and organization of each individual, so called team work, and building up the strength of a team.

Key words : Sports Coaching, Team Sports, Cramer's Suggestions, "Creative"

1) 競技スポーツ学科

I はじめに

2005年12月28日、びわこ成蹊スポーツ大学建学の理念である「世界に通用する新しい日本のスポーツ文化の創造」の担い手となる若い指導者が46名誕生した。びわこ成蹊スポーツ大学は2005年度森昭三学長を申請者として、日本体育協会・日本サッカー協会公認の指導者養成講習会が開催できるJFA認定大学に日本サッカー協会理事会で承認された。滋賀県サッカー協会・滋賀県大学連盟の協力を得て、2005年12月23日から28日までの6日間公認C級コーチ養成講習会をびわこ成蹊スポーツ大学で開催した。40名の同大学サッカー部3回生と、サッカー部以外の2名の学生と他大学生4名の46名が受講し、厳しいハードルを越え合格した。デットマール・クラマー(1925生 元サッカー日本代表コーチ 元独空軍落下傘部隊)が提唱したサッカー競技のライセンス制については経緯のところで述べるが、彼らはクラマーのコーチ学を学びスピリットを引き継ぎ、指導現場に立つための学びのパスポートを手にしたのである。

コーチ学の目的はスポーツ文化の発展であり「スポーツにおいてよりよい成績を上げるための合理的指導に関する知識を体系化したもの」(金原1967)として、スポーツの指導現場に直接生かされるものでなくてはならない。

コーチ学は哲学・美学であり、科学であるといわれているが、勝負はやってみなければ判らないとか、下駄を履くまで判らないとかいわれてきた。勝負の中の暗黙知を形式知に換える作業はオンゴーイングで、常に進化し続けている実践学問である。従ってチャンピオンデーターはひとつのセオリーとなるが、次のゲームでは通用しないことが多い。更に、チャンピオンは敗者から研究し尽くされるため、同じセオリーを使っても連覇は難しくなるのが常である。どのチームも勝つためには、いろんな取り組みをしているため、運も含め

て何が勝てた原因なのかの分析がし難く、形式化しにくいことが多い。「勝ちに不思議あり、負けに不思議なし」といわれるように、むしろ失敗の原因の中に多くの成功へのヒントが隠されていて、その暗黙知から逆算した負けられない方法の形式知が、次の勝負には役に立つことが多いというのが経験豊富な指導者の多くが語るところである。

2000年度筑波大学大学院で開講されたS級ライセンス養成講習会を受講した。その時のキーワードは、オープンマインド・グローバルスタンダード・暗黙知を形式知に換える、そしてパラダイムシフトであった。そのキーワードは、スポーツ文化発展のためにあるコーチ学を学ぶ者が持つべき基本的な姿勢であろう。

ここではチャンピオンスポーツ(集団種目)のコーチ学(sports coaching study)の経緯と展望を述べる前に、まずS級ライセンス受講のコンセプトについて述べたい。

①オープンマインド

心を開き、謙虚に素直な態度で学ぶということであり、クラマーが座右の銘としていた「心を開かなければ何も見えない、何も聞かえない」である。学びの基本として指導者養成の中に伝わっている格言であり、誰もが誠実でピュアーな心でもって学び、人と交わることである。挨拶はその入り口であり、人と人の信頼を表すものである。筑波大学でのS級ライセンス養成講習のスタートは野生の森からであり、オープンマインド・自然との調和・仲間との協調がテーマであった。オープンマインドなくしてコーチングはありえないし、オープンマインドは五感だけでなく六感・七感・八感の潜在意識までの全ての感性をもインバイトする重要なコーチングスキルの一つである。1994年第6回アジアユース(U-16)サッカー選手権大会で初優勝をし、第3回ワールドユース(U-17)サッカー選手権大会に出場したチームには、日本サッカ

一界ではじめてのメンタルコーチ（豊田式メンタルトレーニングメソッド）がスタッフに加わった。多感で不安定な時期の選手をサポートし、個とチームの短期・中期・長期の育成強化に大きな成果をもたらした。

②グローバルスタンダード

コーチ学は世界に通用する強く逞しいクリエイティブな選手・指導者・チームを育成するための学びである。まず個が世界スタンダードでなければ、どんな世界においても強いチーム・組織がつくれるはずがない。そして世界のトップを左右の視野に入れながら、世界制覇を目指す日本オリジナルのチャンピオンスポーツモデルをつくりあげ、世界トップレベルの豊かなスポーツ文化の創造がコーチ学の目指すところである。

③暗黙知を形式知に換える

全ての生物が暗黙知を親から、DNAから受け継ぐ学び（真似びから暗黙知の開発）をベースとして生きる力を身につけてきた。縦社会の文化の伝承として相撲の世界では同じ土俵の上で新弟子が横綱をモデルにして学び成長してゆくが、スポーツの学びも芸術や職人の世界と同じように感性を研ぎ澄まして、見様見真似の暗黙知から暗黙知への学び（伝承）が殆どである。出来なければ体に覚え込ませるまで真似びを繰り返し、反復練習をして技やコツを受け継いできた。その文化の伝承をより合理的にクリエイティブにする作業として、指導現場で培ってきた暗黙知（経験知・経験則・コーチ術・アナログ）を形式知（理論・言語・体系化・デジタル・コンセプトの生成）に換え、個人知を組織知に換え、それらの知の共有化を計ることが文化の進展には欠かせないことである。

1960年コーチ学を日本に初めてもたらしたのはデットマール・クラマーである。（岡野俊一郎 日・独サッカー交流シンポジウム2005）指導者がそれぞれに持っていたコーチ術を理論化し体系化して教えた最初の人であり、日本のコーチ学の祖であり、「日本サッ

カーの父」と呼ばれるゆえんである。

④パラダイムシフト

スポーツコーチングの流れは典型的パターンであった外的コントロールの時代から、コミュニケーションスキルを駆使して人が本来持っている無限の可能性を最大限に引き出す、パートナーシップとしてのコーチングの考え方に変わってきた。その考え方はアメリカを中心に、企業の中でのビジネスコーチングとして発展してきた経緯がある。重要な事はいかにクリエイティブ（創造的）であるかということ、それは知の創造であり、自分で考え自分で解決する知的体力を持つ自立した強く逞しい個をつくるということである。

知の創造には暗黙知から暗黙知（共同化）へ、暗黙知から形式知（表出化）へ、形式知から形式知（連結化）へ、形式知から暗黙知（内面化）への4つのモード（野中郁次郎1996）をスパイラルに循環させる知識創造のプロセス（ナレッジマネジメント）を開発し、ビジョン・戦略・システム・人材・組織をトータルにコントロールできる知的体力のあるクリエイティブな個（リーダー・指導者）の育成を目指すことがコーチングの目標である。

Ⅱ チャンピオンスポーツ（集団種目）のコーチ学（sports coaching study）の経緯

戦前の1936年（昭和11年）ベルリンオリンピックで日本サッカー代表チームは一回戦で優勝候補のスウェーデンを破り「ベルリンの奇跡」といわれた。1940年（昭和15年）に幻の第12回東京オリンピックが予定どおりに開催されていたなら、第二次世界大戦前、既にアジアから世界に向け戦いを進めていた日本のサッカーは、オリンピックやワールドカップで何度か優勝争いをしていたかもしれない。戦後1950年（昭和25年）にFIFAに復帰、1952年（昭和27年）のヘルシンキオリンピックには日本の経済力が無いため、勝ち目の無い団体種目は参加が見送られた。1956年（昭

和31年)のメルボルンオリンピックにはかろうじて韓国を破り予選を突破したが本大会では惨敗を喫し、1959年(昭和34年)ローマオリンピックアジア予選では予選を突破することができなかった。アジアの弱小国になっていた日本のサッカーを1960年(昭和35年)ローマオリンピックの年に、日本蹴球協会はかつての戦争同盟国で世界のトップレベルにいた西ドイツサッカー界より、デットマール・クラマー(当時35才 元独空軍落下傘部隊)を1964年(昭和39年)の東京オリンピックに向けての強化のために日本代表コーチとして招聘した。クラマーは日本の選手・指導者に大和魂を説き、コーチ職人・教師・役者・魔術師としてコーチ術を理論的に体系化したコーチ学を教えた。([「日本サッカーの歩み」1974)4年後の1964年東京オリンピックでは川淵三郎(現サッカー協会会長)・釜本邦茂(現サッカー協会副会長)らの活躍で強豪アルゼンチンを破りベスト8に進出、世界への足がかりをつかんだ。更に4年後の1968年(昭和43年)メキシコオリンピックでは地元メキシコを破り、銅メダルと同時にフェアプレー賞・得点王(釜本)を獲得し世界を驚かせた。

このクラマーは東京オリンピック後日本サッカー界に四つの提言をした。

①日本にトップリーグを作る

1965年(昭和40年)日本サッカーリーグが設立され、1993年(平成5年)Jリーグ(プロリーグ)の発足に繋がる。ラウンドロビン方式(総当たりリーグ戦)は勝ち上がりトーナメント方式のように負けたら試合がなくなるのではなく、全チームが同じ試合数をこなす方式である。したがって「試合は最高の師」「試合終了の笛は次の試合のスタートの笛」という格言に基づき、試合後の分析を重要視し、分析から抽出した課題をトレーニングで克服して、次の試合に臨むという Match-Training-Match メソッドの合理性を中

期・短期の選手・チームの育成強化に生かした。

②指導者の養成とその組織作りをする

- 1969年 FIFA コーチングスクール開催(千葉県検見川)
- 1970年 第1回コーチングスクール開催
- 1974年 公認リーダーを新設
- 1977年 日本体育協会・公認スポーツ指導者制度(旧制度)創設
JFA(日本サッカー協会)「リーダー・コーチ・上級コーチ」の図式を完成する
- 1988年 日本体育協会新制度をスタート
JFA「公認C級コーチ・公認B級コーチ・公認A級コーチ」の図式を完成
- 1991年 JFA少年少女の指導を充実させるために「公認準指導員」資格を創設
- 1992年 JFAプロチームの指導と指導者養成のために「公認S級コーチ」を創設
- 1997年 JFA「公認少年少女サッカー指導員」を創設

以来インストラクター制度・リフレッシュ制度・指導者登録制度・キッズリーダー・公認GKコーチなど日本の指導者のライセンス制度をリードし、日本のスポーツ界に大きな変革をもたらした。(JFA指導者養成ガイド2005)

良い選手・チームを作るためには良い指導者が必要である。それも全ての地域で全てのカテゴリーに質の高い指導者がいなければスポーツ文化は発展しない。サッカー競技の選手生命は長くても20年であるが、指導者は40年—50年以上も活躍し、数多くの良い選手とチームを育成することができる。何よりも指導者創りが選手創りより優先することをクラマーは自らモデルとなって教えてくれた。

③代表チームの強化を計る

日本代表チーム・選手の海外遠征・海外留

学を奨励し、国際交流を深め、トップレベルの国際試合を出来るだけ多く経験して大海（グローバルスタンダード）を知ること。そして少年期からの選手の発掘と育成のためのトレーニングセンターを全国ネットで開設し、一貫指導システムを確立して代表チームの強化に結びつけること。

日本サッカー協会は今、トヨタカップ・キリンカップなど多くの国際大会を主催・共催してきている。

④芝生のグラウンドを確保する

これはJリーグ100年構想の基本コンセプトにもなっている。ドイツのゴールデンプランをモデルにスポーツ文化を地域に根ざす拠点となる芝生（人工芝を含む）のグラウンドが、小学校区にひとつはなくてはならない。0才から100才までの誰もが・何時でも・何処でも・いつまでも歯磨き感覚で、コンビニ感覚でスポーツが楽しめる環境をつくらなくてはならない。

2006年はクラマーが四つの提言をして以来42年目となるが、それらの提言は着実に前進し、日本サッカー界の大きな礎となっている。「日本サッカーの父」と呼ばれるクラマーは、当時世界最先端のドイツサッカーのノウハウを日本の選手・指導者に判りやすく理論的に体系化したコーチ学として教えた。その教えは今も日本のスポーツ界・サッカー界に脈々と受け継がれている。

Ⅲ チャンピオンスポーツ（集団種目）のコーチ学（sports coaching study）の展望

①コーチ学は哲学である

成功であれ、失敗であれ過去の事実を変えることはできない。しかし未来は努力と工夫によってどのようにでも変えることが出来るのが人生であり、何があろうと次にどうするか（NEXT ONE）が人の生き方である。同じようにチャンピオンスポーツのコーチ学は、過去の事実のプロセスと結果を合理的に分析し未来に役立つ知識を理論化し体系化し

て、人類にとって価値あるポジティブな学問として発展させなければならない。孫子の兵法、三国志・諸葛孔明の戦略・戦術、宮本武蔵の五輪書などは指導者のバイブルとしてよく知られているが、日本のサッカー界においてデットマール・クラマーのサッカーマイスター（職人）・教育者・哲学者・役者・魔術師としての生き様と暗黙知を形式知に変え日本の選手・指導者にコーチ学を教えた彼の人生は、今もグッドスタンダードの伝説のモデルである。チャンピオンスポーツの指導者のモデルは、生死をかけた戦のリーダーであった時代の、カリスマ性やオーソリティのあるスーパーな軍師スタイルから、分業化・専門化したビジネスコーチのような外的コントロールをしない、フレンドリーなパートナーとしての要素も持つ幅広いスタイルが求められてきている。

クロマニヨン人は長い声帯を生かした言語能力によって、厳しい環境の変化や外敵に対応し、現在の人類の祖先として強かに勝ち残ってきた。人類のいろんな戦の歴史から培われた英知は、チャンピオンスポーツのコーチ学の中で選手や指導者に生かされなくてはならない。コーチ学は人の生き方や考え方を問う哲学であり、生命の歩んできた方向を説く進化論である。日野原重明（聖路加国際病院名誉院長）が説く「生きかた上手」はコーチ学の原点であり、個が輝き人類に健康長寿や笑顔・友情・平和をもたらすなど、社会の発展に貢献する価値あるものでなくてはならない。

②個の育成強化

「人生は舞台である」（シェイクスピア）

観ることが最高の教育であり、見られることが最高の学習である

天上天下唯我独尊……誰よりも自分が一番大切である

人は地上の星・一隅を照らす人として、自ら輝いて生きることが最高の喜びである。

プレーヤーズファースト、誰もが一度だけ

の人生の主演であり、オンリーワンである。

人にも自分にも魅せる演技力（舞台で輝くための表現力・コミュニケーションスキル）

芸は人なり、チャンピオンスポーツは人格との闘いである。

20世紀に人類のDNAはほぼ解読され、99.9%同じであることが分かってきた。然るに人のパフォーマンスは $Y=aX$ というシンプルな一次方程式で表すことができる。

Y = パフォーマンス 個の能力 人格 人生

X = 個 DNA（全人類のDNA一致率99.9% 2001. 2.11解析完了）

a = 係数 受精・出産から死に至るまでの環境 努力・工夫・知性・感性 コーチ学

X （DNA）をいかに開発しパフォーマンス（ Y ）を高めるかは a の係数によって決まる。すなわち a = コーチ学（後天的環境・努力・工夫・感性）ということが出来る。

a の高め方（コーチ学……個の育成強化）

DNAの70%以上が潜在化（OFF）されているといわれているが、その潜在能力をいかに顕在化（ON）させるかが重要である。遺伝学の世界的権威である村上和雄（筑波大学名誉教授）はDNAをONにするかOFFにするかは、心・意志力・感性・気というものが大きく関与していると「命の暗号」（村上和雄2004）で述べている。「病は気から」・感動・プラス思考の生き方・考え方は、メンタルトレーニングにおいて大変重要なポイントであるといえる。

感性の発達の中で特に重要なものは観て学ぶ力である。1991年ミラーニューロン（伊バ爾マタリゾラッティとそのグループが発見）が発見され、乳幼児期の感性を通しての真似びが、三つ子の魂となり心や性格のベースとなることがわかってきた。インプリンティング（刷り込み、生後まもなく学習され定着す

るもの 自然的・自発的学習 全ての高等動物が持っている）といわれるものであり、乳幼児期の育成の重要性を指摘している。その感性に繰り返し上塗り（感性を磨く）されたものが心となる。心や人格の形成にとって重要なことは、胎児・出産・乳幼児期から継続して絶対的信頼（母性愛）のもとに育成がなされなければならない。乳幼児期の真似びは、知覚・認知・共感・心の読み取り・コミュニケーション能力や言語・動作の獲得・良心・道徳律など生きる力に欠かせない能力が培われ、人格や個性のベースとなる。

U-16（16才以下）世界スタンダード

世界に通用する強く逞しい個を育成するためには、0才から100才の一貫指導の確立が必要である。日本の女子スポーツは早期教育が実り世界スタンダードで大活躍している。フィギュアスケートの浅田真央（1990生）は年齢制限でトリノオリンピックには出られないが、既に実力は世界一である。天才少女と呼ばれ、一日10時間の練習をこなし、一日四食を平らげる。勝つ秘訣はと聞かれると「根性です」と明るく笑顔でこたえる大和なでしこである。

U-16世界スタンダードの日本男子は未だいないが、世界のサッカー界では毎年のようにU-16のスターは生まれている。世界スタンダードの男子選手をつくるためには0歳からの一貫教育を見直さなくてはならない。自立への逆算を世界水準にするためには、人生50年であった頃の14才—17才成人（元服式）の時代の考え方に戻す必要がある。自立への早期教育はスポーツ界だけでなく、日本の青少年育成に早急に取り組まなければならない重要な教育問題であり社会問題である。U-16の年代で、自己教育力（主体的に学ぶ意志・態度・能力のこと1992年学習指導要領）を持つ自立したクリエイティブで強く逞しい日本の若者（特に男子）が、浅田真央のように世界で活躍できるようにしなければならない

い。

Boys be ambitious ! (ウィリアム・S・クラーク博士1826—1886札幌農学校初代教頭)

野心・大志・夢を持ち、自己をどう育てるのか、如何に生きるのか、自己決定し自主的・主体的に学ぶ意志・態度・能力を持ったクリエイティブな個の育成が必要である。

リマインドとインバイト

黒澤明(映画監督)は完璧(パーフェクトスキル)を求めての極限までの繰り返しの徹底(リマインド)を計り、理想の追求には徹底した研究と反復がなくてはならないと、作品づくりのコンセプトを述べている。そして、小澤征爾(オーケストラ指揮者)は、磨き上げられた個(素材・才能)を如何に引き出させるか・招き入れるか(インバイト)がオーケストラのダイナミックなハーモニーを生み出すためのキーワードだといっている。

何れの言葉もコーチ学にとっては示唆に富む重要な言葉であり、指導実践の現場において選手・指導者の中で紐解いてゆかねばならない暗黙知の中から生まれた形式知だといえる。

③個の組織化(チームワーク)強化

組織の定義……分業・支配関係が目的遂行のために特に意識的・計画的に制度化された集団

個の尊重・命の尊厳をうたう個人主義が成熟しないところに真の民主主義は存在しない。先ず個ありき 個にタレント性がなければ魅力的な組織は生まれない。

強烈な個性が舞台・ピッチを魅了し感動的なドラマを作る。スポーツは総合芸術。

二人組

点から線へ・ペアリング・生殖(新しい生命を生み出す)・個と個の出会い

良い女が良い男を創り、良い男が良い女を創る。(共育)

クリエイティブな出会いは互いを触発して

共育しあう、人生は出会いである。

選手と選手・師弟・親子・兄弟姉妹・夫婦・男女・恋愛・友人・ライバル

幼児期に「見て見て世代」という自我の芽生えや自己主張・自己顕示欲の激しい時期があるが、人間は生涯変わらずその本性を持ちつづけている。組織は二人組みから始まるが、お互いを鏡に映し出しながら学びあい成長しているといえる。ピグマリオン効果で知られるようにお互いが信頼と尊敬の心を持ち、褒める・愛でるなどのポジティブな評価をし合うことによってDNAがONになり、互いに輝きを増し美しく綺麗になり自信を持ってゆく。重要なことはクリエイティブな個がクリエイティブな出会いによって、クリエイティブな組織・チームが生まれるということである。

三人組以上(グループ・チーム)

線から面へ・トライアングル

4・5・6・7・・・11・・・∞

仲間・一味・家族・チーム・組・軍団・クラブ・学校・ソシオ・民族・社会・国家

友情は最高の戦術……人類最大の財産は友情である

友情は喜び・勇気・ライバル心を倍にし、悲しみを半分にする

コミュニケーションスキル・クリエイティブな人間関係

アイコンタクト・コーチング&リスニング・トライアングル

一味同心・絆・連帯・団結力・ハーモニー

チームワーク……個が活かされる組織・ワンフォアオール・オールフォアワン
長所を生かし短所を補うシステム・役割分担・スタイル

オーケストラ的チームワーク(近江達枚方FC)

(長所を最大限に引き出した個と個が

融合・調和して、素晴らしいハーモニーを醸し出すこと……個の融合・共感・共鳴・共振・触発・連鎖反応・同調・熟成・醸成)

リーダーシップ (キャプテンシー)・メンバーシップ

フォアザチームプレー・フォアザフラッグ

チームカラー・伝統・ナショナリズム

指導者・コーチ・審判がいなかった時代のスポーツは、キャプテンが全ての権限と責任を持ってゲームをコントロールしていた。日本の古き時代のがき大将と同じで、彼が正義でありルールでありモラルであった。その強烈なリーダーシップによってチームカラーやスタイルが決まり、連帯や絆の強さが決まった。今もそのリーダーシップ (キャプテンシー) とメンバーシップのあり方は、勝つためのチームプレーにおいて大変重要であり、チームの人間関係のコアをなしている。日本サッカー界の改革と世界制覇の夢のストーリーを、先頭に立って実践している川淵三郎 (現会長) は、自らをキャプテンと呼び、チームの素晴らしいリーダーとしての役割を演じている。

ディスプリン……個を生かし組織化するためのチーム内の約束事・決め事・ルール・規律・基本戦術・共通理解・コンセプト・優先順位

チームの目標が高いほどディスプリン徹底の厳しさが要求される

ビジョン・夢の共有……百年構想・知の共有・地域づくり・国づくり・使命・大義・マネジメント・情報の収集整理再構築・シナリオ・総合芸術

コーチ学は指導者と選手が、共に学ぶことによって選手のプレーやチームパフォーマンスの向上につながる。指導者の視点と選手の視点の両方向からのアプローチが、双方の知の創造を増幅させて互いの理解と成長を高める。指導者・選手共に自己教育力の高い自立

したクリエイティブな個であることが重要であり、お互いを高めあえる出会いが良い出会いであり、そんなクリエイティブな個が存在するチームがよいチームである。

④コーチングのトレンド

コーチング (指導法) はコーチ学を中心にあり、ティーチングとは異質のものである。教師がチャンピオンスポーツの指導者をしていような国では、スポーツ文化は発展しないと、日本の学校教育に頼るスポーツのスタイルを海外から厳しく批判されてきた。スポーツは重要な教育のツールであるが、学校教育や体育の範疇にとどまらない人間の豊かさや幸福を生み出す文化であり、スポーツやコーチ学は人間を取り巻くあらゆる分野からアプローチして学び、実践してゆかねばならない。

コーチングのスタイルは一人のカリスマコーチを必要とした時代から、多くの専門分野のコーチがそれぞれのパートに責任を持って仕事が行われる分業制となり、スタッフのチームワークでパフォーマンスを競う時代となってきた。

トッププロサッカーのチームスタッフにはゼネラルマネージャー・監督・コーチ・GKコーチ・フィジカルコーチ・メンタルコーチ・ビデオ分析コーチ・トレーナー・マッサー・ドクター (整形・内科・歯科)・イクイップメント (装備・洗濯)・栄養士・マネージャー (チーム担当・渉外広報担当・通訳担当)・スカウト (対戦チーム担当・選手スカウト担当) などの多岐にわたる専門分野に分かれて仕事をするようになってきている。

関連して、フロント、エージェント、セカンドキャリア担当、下部組織スタッフ、広報・普及担当、ハード管理など数多くのスタッフを抱える大きな組織となっている。

日本サッカー協会では世界戦略を目指す育成強化のためにテクニカルハウスを設置した。世界のスポーツ界はAV機器の発達による大量のデータ収集と分析処理・管理の能

力とフィードバックのスピード・タイミングが、強化や勝敗の鍵を握るようになってきている。

⑤競争の哲学と文化

強いものが勝つのではなく、勝ったものが強い

勝てば官軍負ければ賊軍・正義・新しいルール (RIGHT)・世界制覇

世界一になったチームの戦術・スタイルがモデルとなりトレンドとなる

世界一になった国の指導者とコーチ学が、世界のグッドスタンダードとなる。

1998年仏W-CUPにおいて開催地のフランスが、30年間のユース育成システム（エリートの一貫指導）の成果を基に見事に優勝した。ジダンのようなスーパースターを生み出し、当時代表監督のエメ・ジャッケやアーセン・ベンゲル（アーセナル）、ジェラルド・ウリエ（リバプール）、アリゴ・サッキ（イタリア代表）、ギ・ルー（オセール）、フィリップ・トルシエ（前日本代表）などの優秀な指導者を世界に輩出した。

指導者にとって失敗が最大の財産となる。コンプレックス（己の弱点を知る）や敗戦や挫折の屈辱が、負けた原因の分析解明（コーチ学）を学ぶ最大のモチベーションとなる。

Play hard……ベストを尽くす・一生懸命・ワイルド&ピュアー

Play fair……清く・正しく・美しく・友情・リスペクト

Play safe……安全・健康・いつまでも・長寿・平和

Have fun……笑顔・面白い・楽しい、リピート・生活化・豊かな人生

コーチ学は喜び・楽しみ・感動の追求でもあり、より良い結果（グッドパフォーマンス）や、より良い人生の追求（スポーツフォアベターライフ）が目標であるといえる。人間も自然界と調和した生命の一員である以上、常

に競争を避けては通れない。競争によってバランスが保たれ、生命力が高められてきたことは、40億年の生命の進化の歴史であるDNAからみても明らかである。便利さを追求する文明社会にはなくなりつつあるワイルドな競争原理と、自主性・主体性をうまく組み合わせた筋肉運動と感動が伴う遊び・ゲームとしてスポーツが発展してきた。そのスポーツが素晴らしい文化として発展してゆくために、暗黙知を形式知に換え、個人知を組織知に換える知の創造と共有をはかるためにコーチ学は存在する。

「科学は最高のスポーツだ」「結果が全て、一番以外は価値がない、世界記録を狙う」

「99.9%が失敗、失敗を楽しめ、失敗から発見が生まれる、常識にとらわれない」「めげない根性、挫折から高いモチベーションが生まれる、プロフェッショナルとはどんな状況でも楽しめること」とNHKの番組「プロフェッショナル仕事の流儀」の中で、古澤明（東京大学物理学工学助教授）は科学研究の哲学そのものでもあり、スポーツと同じく強く逞しい個の重要性を述べている。

スポーツは人々の生活を豊かにする素晴らしい文化として、今やスポーツフォアオール・スポーツフォアベターライフといわれるように、人間生活には欠かせない重要な人権のひとつとなっている。

スポーツがマスメディアを通して一般化・大衆化し、スペインのプロサッカーチームレアル・マドリッドが2004—2005シーズンの収入が384億円となるなど巨額の富を生み出すビジネスとなってきた今日、コーチ学は人類の方向性を問う百年の良識を持った重要な学問として、スポーツ文化と人類の発展に大きく貢献してゆかねばならない。

引用・参考文献

金原勇（1967）コーチ学的な研究について。体育科教育15巻6号，pp.9-11.

- 日本蹴球協会編（1974）日本サッカーの歩み
講談社.
- 日本サッカー協会テクニカルハウス編（2006）
テクニカルニュース VOL.11 クラマーの4
つの提言, pp.30-31.
- 日本サッカー協会技術委員会編（2005）指導者
養成事業ガイド, p.3.
- 日野原重明（2001）「生きかた上手」ユーリー
グ.
- ブライアン・サイクス（2001）「イブの7人の娘
たち」大野晶子訳 ソニーマガジン.
- 村上和雄（2004）「生命の暗号」サンマーク文
庫.
- ソゾラッティ他（1991）ミラーニューロンの発
見 イタリア・パルマ大.
- 学習指導要領（1992）自己教育力 文部科学省.
- ウイリアム・S・クラーク（1876）少年よ 大
志をいだけ 札幌農学校初代教頭.
- 近江達（1929生）オーケストラ的チームワーク
枚方FC創始者 医学博士
- 「日本サッカーにルネッサンスは起こるか？」
（1992）自費出版.
- 古澤明（1961生）東京大学助教授 物理工学
「プロフェッショナル仕事の流儀」NHK2006
年2月14日 21：15－21：58放映.